

カンボジアに灯る希望の光

写真・文
池口洋之
Hiroyuki Ikeguchi



練習前に掛け声が上がると。万国共通だ（黄色いユニホームを着ている選手がソパンさん）

「ムオイ・ピー・バイ（一・二・三）ヨ
ー!!!」上半身裸になった男たちが声を上げた。カンボジア、プノンペン郊外にある日本のNGO「難民を助ける会」の敷地内にある屋外バスケット兼バレーボールコート。車椅子に乗った男たちがボールを追いかけている。車椅子バスケットボール。近年、日本でも井上雄彦氏の漫画等で知名度が上がってきているスポーツのプレーヤーたちだ。彼らはこのNGOの車椅子工房で車椅子を作る職人や、職業訓練校で技術を学ぶ学生たち。みんな障害を持っている。

カンボジアの障害者数は人口の約一・四％。その多くが地雷被害者やポリオ患者だ。このプレーヤー達も半数が地雷による足の切断、半数がポリオによって障害を持っている。カンボジアでは宗教観からくる偏見で、障害者にとっては社会に出にくい環境にある。しかし、近年はパラリンピックに出場する選手が出るなど、少しずつスポーツを通して自分を社会に出していきけるようになってきた。

普段の仕事では黙々と作業を続ける車椅子バスケットボールの選手たち。カメラを向けてもちょっとしたにかむ程度。そんな彼らがコートに入ると人格が変わったかのようには輝きます。全身で、喜びや楽しさ、悔しさを表現している。全力でプレーしている。しかし、バスケットボール自体がマイナーなスポーツのカンボジアでは車椅子バスケットボールを取り巻く環境は決して良い



青空の下でシュートを放つ



乗用車椅子用を改造した車輪。全てが手作りだ



太陽の光を浴びてのプレー。心地がいい

ものとはいえない。まず、プレーヤーの使っているバスケットボール競技用車椅子。日本で使われている競技車は、チタンやアルミを使いとても軽いのに対し、彼らの競技車は鉄製フレームの手作りで非常に重い。タイヤも競技用ではなく乗用のタイヤ。競技用に比べて太くやわらかく、溝も多い。コートはコンクリートの屋外コートのみ。しかもバレーボールコート兼用でゴールにネットは無く、リングのみ…。私は現在、日本で車椅子バスケットボールをしているので、少し練習に参加させてもらったが、車椅子がとにかく重く、加速するのもブレーキをかけるのも大変。おまけに摩擦の大きいタイヤで加速とブレーキングを繰り返さないといけないので、三〇分もすると手の皮が焼けて破れそうになった。しかし、青空の下でのプレーは新鮮だ。南国の太陽と乾いた風が心地いい。

チームにボールは一つだけ。車椅子が壊れたら修理する費用が無いので、激しいプレーはできない。さらにバレーボールがメジャーなスポーツのため、普段コートはバレーボールに使われる。それでも選手たちの情熱は変わらない。その中でも車椅子バスケットボールカンボジア代表の経験も持ち、選手兼コーチのソパンさんは、自分のチームだけではなく、カンボジア各地を回り、競技の普及と新たな選手の指導にも力を入れている。「カンボジアにはたくさんの歩けない人がいる。そして、そういう人



試合の合間に義足の調整を行う選手たち



ハイレベルな戦いが続く。3人とも地雷被害者だ（右端の選手は左腕切断）



観客から声援が飛ぶ

たちの中には、なかなか外に出てこれない人もいる。車椅子バスケットボールなら、そういう人たちだって楽しむことができるんだ。だからたくさんの人たちに、このスポーツを知ってもらい、車椅子に座ってほしいんだ。すべての人々にこのスポーツを伝えたい。それが僕の夢だよ。そして、外国と試合ができるようになればいいね。」ソパンさんは語る。いつか同じコートで戦える日が来るだろう。

ある週末、ソパンさんたちの練習しているコートの周りに様々なほりが立ち、変わった雰囲気になった。障害者バレーボール（スタンディング）の国内リーグ戦が開かれるのだ。昨年より始まったリーグ戦は全一二チームが参加。NGOや企業がスポンサーに付き立ち上がったリーグ戦の選手の七〇％が地雷被害者。残りはポリオや交通事故などで障害をもった人々だ。選手たちの着ているチームスポンサーのロゴの入った色鮮やかなユニホームや、横断幕などとても華やかだ。家族や近所の人々の声援が飛ぶ。代表選手選考も行われるため、選手たちは真剣そのもの、ハイレベルの試合が続く。選手たちの義足は、カンボジア製の一般的なものでスポーツ用のものではない。試合の合間に義足の修理や調整をしている選手たちもいる。先進国に比べると、まだまだ厳しい環境の中、懸命にプレーを続けている。

長い戦乱の時期を終え、やっと安定期に



「サバァイ」(楽しい)。スポーツの原点がここにある



力強い熱戦が繰り広げられる



小さなサポーターも選手を支えている

入ってきたカンボジア。しかし、貧困や地雷など、様々な問題が続いている。今でも数百万個も残っている地雷では、年間一〇〇人以上の人々が傷つき続けている。地雷除去や義足の提供など、ハード面での支援はこれまで続いていた。しかし、地雷被害者たちの心のケアは置き去りにされてきた。退院後、自分の村に戻っても、疎外感や孤独を感じ、同じ境遇の仲間がいる病院に遊びに通う被害者もいる。疎外感から村を捨て、都会に出てきて、物乞いをするしかない被害者もいる。そんな被害者たちの心を繋ごうと、今年一月には日本のNGOによってラジオ番組が放送され、大きな反響を受けた。この国で障害者スポーツが盛んになれば、さらに同じ境遇の人々のつながりができ、強いチームになれば、みんなの希望にもなる。バレーボールは、次の北京パラリンピックではメダルも期待できる強さだという。もし、そうなれば、彼らの自信につながるだけでなく、社会的な偏見も、きつと減っていくだろう。現在、バレーボールに続き車椅子バスケットボールもリーグ戦を作ろうと奔走している人々もいる。幸か不幸か選手候補はたくさんいる。「強くなつて、皆に希望を与えたいんだ。」ソパンさんが言う。今、傷ついた人々の心に、希望の光が灯ろうとしている。(いけぐち ひろゆき／(有)ワールドフォト)

<http://www2.odn.ne.jp/~cag07920/sante>